

# 国際関係論

## 第1回 イントロダクション

伊藤 岳

富山大学 経済学部 2018 年度前期

Email: [gito@eco.u-toyama.ac.jp](mailto:gito@eco.u-toyama.ac.jp)

April 12, 2018

# Agenda

- 1 ガイダンス
  - 講義の概要と目的
  - 履修城の注意
  - 成績評価方法・注意点
  
- 2 国際関係のミクロ的基礎
  - 政治, 戦争, 交渉
  - 戦争の交渉モデルへの導入

# 講義の概要

- ▶ 「戦争の交渉モデル (bargaining model of war)」を中心とした国際関係論 (International Relations, IR; 国際政治学)
  - ▶ 国際紛争・国内紛争の原因論を巡る学術的な枠組みを、最新の知見・研究動向にも触れつつ概説する
- ▶ **関心**：「有形無形のコストにもかかわらず、なぜ戦争が起きるのか」「なぜ、武力行使以外の手段 (e.g., 交渉) で係争を解決することに失敗するのか」という問い、およびこれに関連する問い。たとえば、
  - ▶ なぜ国際紛争・国内紛争が生じるのか。両者の類似性・差異は何か。
  - ▶ 国内政治体制は、国際紛争にいかなる影響を、なぜ与えるのか
  - ▶ 国際制度の存在や国内政治制度の存在は、武力紛争の生起・終結・再発にいかなる影響を与えるのか etc.
- ▶ **基本的発想**
  - ▶ 政治は、「価値の (権威的) 配分」 (D. Easton), あるいは「関係者の同意に基づく価値配分」 (副読本の中西・石田・田所本)
  - ▶ 武力行使にせよ対話/交渉 (による係争解決) にせよ、価値配分・同意を実現する手段という意味で、武力紛争は「他の手段をもってする政治」 (Clausewitz)
  - ▶ 「異なる係争解決手段が選択される理由」を、戦争の交渉モデル (合理的選択論/戦略的アプローチ) を用いて考える

# なぜ武力紛争を中心に学ぶのか

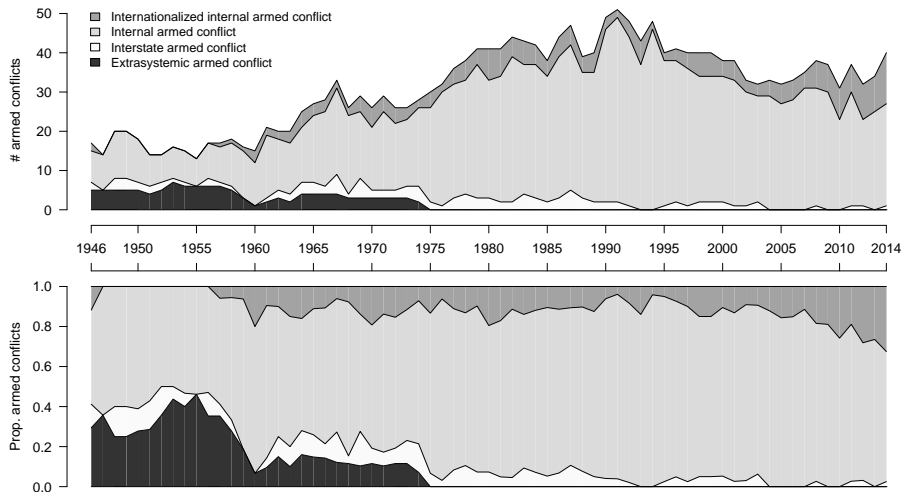
- 1 現象として重要だから (社会的重要性)
- 2 知的な関心を惹く問題だから (学術的重要性)
  - ▶ 古代ギリシャ, 古代中国以来, 学術的な検討が継続してきた
  - ▶ 国際関係論, 比較政治学, 経済学の研究者の共通の関心事
  - ▶ 国際関係論は世界大戦への反省から生まれた分野, 現在でも武力紛争は研究の中心
- 3 「戦争の原因」を知ることは, 「戦争を防ぐ手立て」につながるから (政策的重要性)
  - ▶ “War, to be abolished, must be understood. To be understood, it must be studied” (Deutsch, 1970, 473)

# 武力紛争のコストと継続



Source: 毎日新聞社 『一億人の昭和史：日本占領 2』

# 武力紛争のコストと継続



Data drawn from UCDP/PRIO ACD, 1946–2014

## 「もっともらしい」回答

Q: 有形無形のコストにもかかわらず、なぜ戦争が起きるのか（なくならないのか）？

A1: その戦争が必要だったから。他の手段がなかったから。

A2: 妥協点がなかったから。

A3: 一般に、国家は戦争その他の手段によって、領土・勢力の拡張を志向するから。

論理的には正しいが、これらの回答は学術的には「最後の手段」  
往々にして検証・実証できない  
また、戦争を避けるための方策も教えてくれない

# 講義の目的

- ▶ 国際関係論の
  - ▶ 「**問い**」を知る —— 国際社会・国内社会における武力紛争を巡る論点・パズルと既存の回答を理解する
  - ▶ 「**回答**」を知る —— 国際関係、特に武力紛争の背後に働く因果メカニズムを理解する
  - ▶ 「**道具**」を知る —— 国際関係論の基礎的な理論・モデル・思考様式を理解する (ゲーム理論, 計量分析, 事例分析)
- ▶ 詰まる所, 「問い」「回答」「道具」やその歴史・変遷を学ぶことが、特定の学術領域を学ぶということ
- ▶ 戦争の交渉モデルを中心に、戦争と平和、あるいは広く国際関係全般の問題を「読み解く」力を養う。



# 講義は3部構成

## 第1部

- ▶ 国際関係論の分析枠組み，歴史，学術論争の基礎を学ぶ

## 第2部

- ▶ 「国家間の戦争と平和」—— なぜ戦争が起きるのか。戦争はなぜ続き，なぜ終わるのか。戦争を防ぐには，どのような手段がなぜ有効なのか。

## 第3部

- ▶ 「国家内の戦争と平和」—— なぜ内戦が起きるのか。なぜ続き，なぜ終わるのか。内戦を防ぐには，どのような手段がなぜ有効なのか。国家間の戦争と平和の論理と，国家内の戦争と平和の論理は，何が同じで何が異なるのか。

# 教科書

## 教科書

- ▶ Jeffrey A. Frieden, David A. Lake & Kenneth A. Schultz. 2015. *World Politics: Interests, Interactions, and Institutions*. 3rd edition, New York: W.W. Norton. (以下, FLS). 1st/2nd edition でも可 (Amazon 購入推奨)
- ▶ **教科書指定箇所 and/or 指定文献を読んでもらうこと!**

## 副教本

- ▶ Andrew H. Kydd. 2015. *International Relations Theory: The Game-Theoretic Approach*. Cambridge: Cambridge University Press —— ミクロ経済学的/合理的選択論的な国際関係論の教科書・新定番
- ▶ 山影 進. 1994. 『対立と共存の国際理論』東京大学出版会 —— 国際関係の「セントラル・ドグマ」とは? 「国民」を考えずして国際関係論を語ることもなかれ
- ▶ 山影 進. 2012. 『国際関係論講義』東京大学出版会 —— もう一つの「3つのI」の教科書.
- ▶ 中西 寛・石田 淳・田所 昌幸. 2013. 『国際政治学』有斐閣 —— 歴史・理論(史)・経済学的アプローチにバランス良く目配せされた良本
- ▶ 砂原 庸介・稗田 健志・多湖 淳. 2015. 『政治学の第一歩』有斐閣 —— 利益・戦略的相互作用・制度に基づく政治学の平易な教科書

# 履修上の注意：講義の中心と「ならない」こと

## 現実の国際関係の解説・論評

- ▶ 例：「近年、A国とB国の協力関係が深まっています。その狙いは～」 「～地域機構の会議が～その背後には～」 「某NK国のミサイル発射・核実験の背後には～」
- ▶ ただし、「現実の動きはどうでもいい」ということではない（これらを論理的・実証的に説明することは重要）

## 歴史的事例の暗記

- ▶ 講義では近代国際関係史や歴史的事例に触れるものの、それを暗記すること自体は目的ではない（ただし、IRで「常識的な」事例・言葉・学説・概念は覚える）
- ▶ **歴史や現実の事例を「読み解く」こと、因果的説明を提示する能力を養うことが目的**

# 履修上の注意：講義の中心と「なる」こと

## 理論

- ▶ 合理的選択論，特にゲーム理論的なモデルを中心とした理論 (戦争の交渉モデル bargaining model of war)
- ▶ 言い換えれば「なぜ戦争が生じるのか」という問いに論理的かつ検証可能な回答を与える理論
- ▶ ひと昔前の教科書で標準的だった、「現実主義 (realism)」「自由主義 (liberalism)」「構成主義 (constructivism)」等は講義の中心ではない

## 実証

- ▶ 上記の意味での理論を踏まえた実証研究の知見 (計量分析が中心)

# 履修上の注意

- ▶ 特段の履修制限は設けない
  - ▶ 高校レベルの世界史の知識や、教養課程レベルの政治学の素養があることは望ましいが、必須ではない
  - ▶ 同様に、初歩的な (非協力) ゲーム理論の知識・理解があれば望ましいが、必須ではない
- ▶ FLS の教科書は、interests, interactions, institutions の「フレームワーク」に基づいて構成されている
- ▶ この枠組みは、現在の国際関係論および政治学の関連分野において標準的な、方法論的個人主義 (methodological individualism), 特に「戦争の交渉モデル」に基づく
  - ▶ 他の教科書を用いる「国際関係論」「政治学」系科目と毛色が違う (かも)
  - ▶ ミクロ経済学, ゲーム理論を履修済みの場合は、この講義のアプローチの方が理解しやすい (はず)

# 履修上の注意

- ▶ 本講義では、国際関係論のすべての領域・争点を扱う時間的余裕はない。特に重要なものとして、以下がある。
  - ▶ **主体 (再) 形成の問題**：そもそも、国民国家 (nation-state) のような主体は、いかに形成されるのか。国際社会における国家間の相互作用 (e.g., 戦争) を通して、主体はいかに再形成されるのか (**国家や武装勢力の存在は与件ではない!**)
  - ▶ 国家間の経済関係・国際政治経済 (International Political Economy, IPE)
  - ▶ 国際秩序形成, 国際規範の変容・動態
  - ▶ 高度なゲーム理論的モデルや, 計量分析の手法 (初歩は扱う)
- ▶ **主体 (再) 形成の問題は, 「戦争と平和」の問題を考える上でも重要な論点**
- ▶ **本講義でとる (主体の存在を与件とする) アプローチの本質的限界**
- ▶ この点については, 副教本の山影『国際関係論講義』と『対立と共存の国際理論』をあわせて読み進めると理解が深まる

# 講義資料・予定

## 講義資料

- ▶ 講義資料 (スライドの PDF ファイル) および課題の解説資料等は講義ウェブページにアップロードする
- ▶ URL: [http://cfes-project.eco.u-toyama.ac.jp/education/course\\_2018/international\\_relations\\_spring2018/](http://cfes-project.eco.u-toyama.ac.jp/education/course_2018/international_relations_spring2018/)
- ▶ 前日 19:00 時点でアップロードされている場合は、紙媒体では配布しない

## オフィスアワー

木曜日 5 限・個別相談

## 休講予定

- ▶ 7/5 (木). 補講は未定

# 成績評価方法

## 1 リアクション・ペーパー (60%)

- ▶ A4 で1枚程度 × 2-3回を予定

## 2 最終レポート (40%)

- ▶ 3,000-5,000字程度を予定 (英語でも可)
- ▶ 自由論題もしくは一定の設問から「問い」を選択して、回答とそれに至るフレームワーク、実証的根拠を提示する (予定)
- ▶ 教室での記述試験は行なわない (確定)



# 戦争とは何か？

## 操作的／実証的には

- ▶ “An armed conflict is a contested incompatibility that concerns government or territory or both where the use of armed force between two parties results in at least 25 battle-related deaths” (UCDO/PRIO Armed Conflict Dataset Gleditsch et al., 2002, 618–619)
- ▶ 「戦争 (war)」は、1,000 人以上の “battle-related deaths” を出した武力紛争 (armed conflict)
- ▶ 主な係争対象：領土，政策，政治体制

## 概念的／理論的には

- ▶ 「政治の手段」(単なる大規模な「殺し合い」や軍事衝突ではない)
- ▶ 交渉の失敗 (bargaining failure; war as an outside option)
- ▶ 交渉過程 (bargaining process; war as an inside option, T. C. Schelling)

## 交渉の失敗としての戦争

- ▶ 大半の戦争(紛争)は, 相手の「絶滅」まで戦うのではなく(「絶対戦争」), いずれかの時点で妥結(特に交渉による合意)して終結する(「制限戦争」)
  - ▶ 仮に「無条件降伏」だとしても, 合意している!
- ▶ 事後に合意できるのであれば, 事前になぜ外交交渉によって係争解決・合意に至ることができなかったのか?
- ▶ 「戦争に伴う有形無形のコスト」を支払った上で合意するのであれば, コストを踏まえて事前に合意しておけば, 双方とも「得」だったはず
- ▶ 何らかの原因で「交渉の失敗」が生じたために, 非効率な戦争に至った
- ▶ なぜ, 交渉による係争解決に失敗するのか. なぜ, 他の手段ではなく, 武力行使による係争解決が選ばれるのか

# 政治, 交渉, 戦争

## 交渉過程としての戦争

- ▶ **開戦したからといって, 政治・外交が終わる訳ではない**
  - ▶ 戦時と平時 (戦争と平和) 連続的に捉える国際関係論, 断続的に捉える国際法学 (砂原・稗田・多湖本 第10章, 中西・石田・田所本 第3章も参照)
- ▶ 戦争は, あくまで政治目的実現のための手段. あるいは, 「他の手段をもってする政治」 (Clausewitz)
  - ▶ 往々にして, 「相手を絶滅させるために」 戦っている訳ではない!
  - ▶ ただし, 軍事力をもって自らの意思を相手に強要するという意味で, 他の平和的な政治の手段と戦争は異なる
- ▶ ただし, 「(戦前の) 交渉の開始」や「戦争 → 交渉」の移行は**紛争当事者双方の同意**が必要なのに対して, 「交渉 → 戦争」の移行は (議論はあるものの) **一方の当事者による行動選択から実現可能な点に注意**

# 政治, 交渉, 戦争

## 交渉過程としての戦争 (Schelling, 1966, 7)

“War appears to be, or threatens to be, not so much a contest of strength as one of endurance, nerve, obstinacy, and pain. It appears to be, and threatens to be, no so much a contest of military strength as a **bargaining process** — dirty, extortionate, and often quite reluctant bargaining on one side or both — nevertheless a bargaining process.”

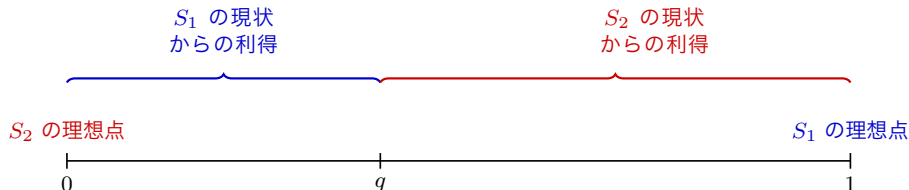
# 戦争の交渉モデル

- ▶ 交渉の失敗・交渉の過程としての戦争
- ▶ 戦争の不合理 (事後的にパレート非最適/非効率 *ex post inefficient*)
  - ▶ 「後から考えれば無駄なことをした・・・」
  - ▶ 常に「事前に回避可能」という意味ではない
- ▶ **戦争の交渉モデル**：係争対象の「パイ」を配分する手段として、交渉と武力行使を「異なる手段」として位置付ける (手段選択の問題として戦争を捉える)
  - 1 **戦争コストと交渉可能領域の関係性？**
  - 2 **武力による威嚇の役割？**
  - 3 **交渉の失敗/武力紛争の原因？** (なぜ、効率的であるはずの交渉による係争解決に失敗するのか？)
- ▶ まずは、「**戦争が起きないモデル**」を考え、**思考を整理する** (厳密な仮定は省略)

# 戦争の交渉モデル

## 状況設定

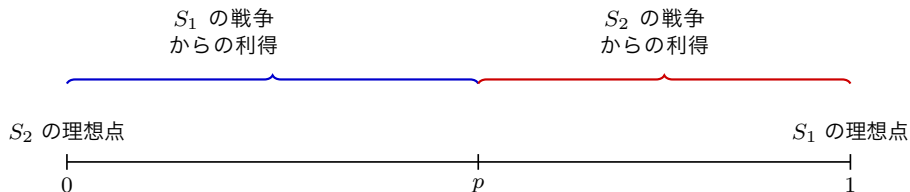
- ▶ 2つの国家  $S_1$  と  $S_2$  が、国境線の確定・変更を巡り対立している
- ▶ 2国間での領土の配分状況を、区間  $[0, 1]$  の数直線で表現する
- ▶  $S_1$  にとっては1が、 $S_2$  にとっては0が、理想の領土配分とする
  - ▶ 分かりにくければ、 $S_1$  にとっては「 $S_2$  にあげる領土」が  $0/1$  のときが理想、 $S_2$  にとっては「自分が支配できる領土」が  $1/1$  のときが理想、と考える
- ▶ 現状 (Status Quo;  $q$ ) の国境線では、 $S_1$  は  $q$  の領土 (利得) を、他方  $S_2$  は  $1 - q$  の利得を得ている



# 戦争の交渉モデル

## 戦争という「政治の手段」の評価

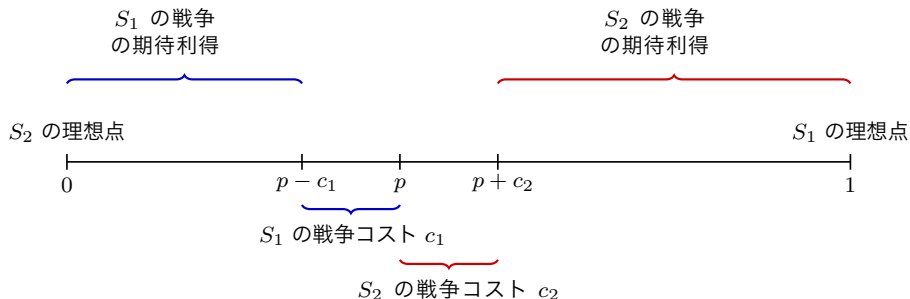
- ▶ 国家  $S_1$  と  $S_2$  の勢力バランス (勝敗確率) を,  $p \in [0, 1]$  とする
- ▶ 戦争という「政治の手段」を採用した場合に生じる「戦争のコスト」の大きさを,  $S_1$  については  $c_1$ ,  $S_2$  については  $c_2$  とする
  - ▶  $c_i > 0$  は, 戦争に伴う「有形無形のコスト」と解釈する (e.g., 人命の損失, 財政的負担, 社会の疲弊)



# 戦争の交渉モデル

## 戦争という「政治の手段」の評価

- ▶ 戦争の期待利得は、勝敗確率  $p$  と戦争コスト  $c_i$  に依存する
- ▶  $S_1$  の戦争の期待利得  $= p \times 1 - c_1 = p - c_1$
- ▶  $S_2$  の戦争の期待利得  $= (1 - p) \times 1 - c_2 = 1 - p - c_2$





# 戦争の交渉モデル

## 整理：戦争と交渉それぞれの期待利得

- ▶ 以上を踏まえると、ある  $p$  について、「戦争の期待利得」と「交渉による解決の期待利得」はどのような関係にある？
  - ▶ 仮定 1：「交渉による解決」には特段のコストはかからない
  - ▶ 仮定 2：「戦争による解決」にはコスト  $c_i$  がかかる
- ▶ 発想：戦争は「他の手段による政治」なのだから、戦争と戦争以外の手段の利得を比べる（「いつ戦争が選ばれ得るか」を考える）

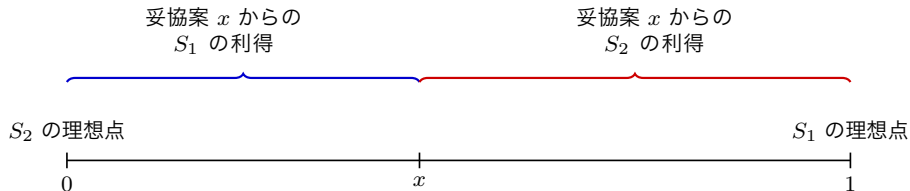
		係争解決の手段	
		交渉	戦争
国家	$S_1$	$p$	$p - c_1$
	$S_2$	$1 - p$	$1 - p - c_2$

# 戦争の交渉モデル

## 外交交渉が妥結する場合？

▶ いま、外交交渉を通じたある妥結案  $x \in [0, 1]$  が存在する

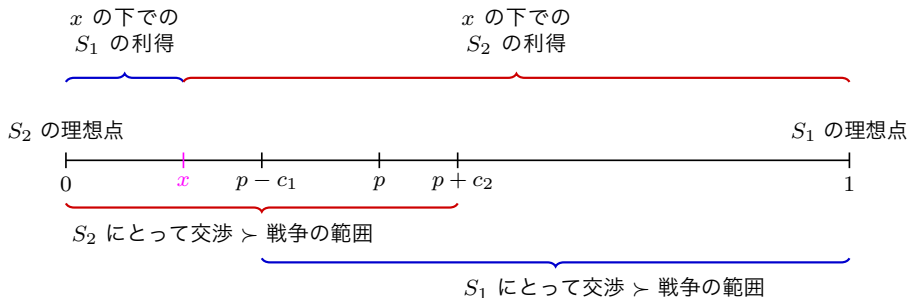
- 1 戦争の期待利得を踏まえると、 $S_1$  と  $S_2$  は  $x$  はどのように評価するだろうか？
- 2 どのような  $x$  であれば、戦争を回避し、平和的に係争を解決する合意を達成できるだろうか？



# 戦争の交渉モデル

## 状況 1

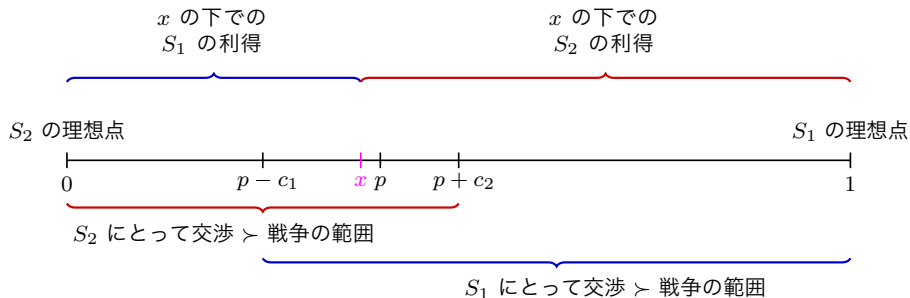
- ▶  $x < p - c_1$  とする
- ▶ このとき、国家  $S_1$  と  $S_2$  は、戦争による解決と妥協案  $x$  による解決のいずれを志向するだろうか？



# 戦争の交渉モデル

## 状況 2

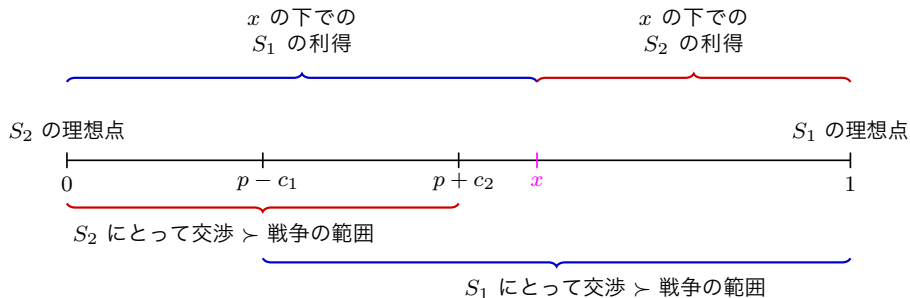
- ▶ 今度は,  $x \in [p - c_1, p + c_2]$  としてみる
- ▶ このとき, 国家  $S_1$  と  $S_2$  は, 戦争による解決と妥協案  $x$  による解決のいずれを志向するだろうか?



# 戦争の交渉モデル

## 状況 3

- ▶ さらに,  $x > p + c_2$  の場合を考える
- ▶ このとき, 国家  $S_1$  と  $S_2$  は, 戦争による解決と妥協案  $x$  による解決のいずれを志向するだろうか?



# 戦争の交渉モデル

## 整理：交渉可能領域 (bargaining range)

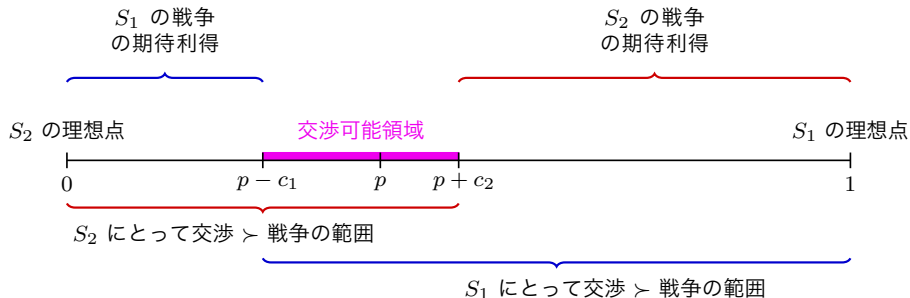
- ▶ 再掲：どのような  $x$  であれば，戦争を回避し，平和的に係争を解決する合意を達成できるだろうか？

妥協案 $x$ の水準	$S_1$ の選好	$S_2$ の選好
$x < p - c_1$	戦争 $\succ$ 交渉 ( $p - c_1 > x$ )	交渉 $\succ$ 戦争 ( $1 - x > 1 - p - c_2$ )
$x \in [p - c_1, p + c_2]$	交渉 $\succ$ 戦争 ( $x \geq p - c_1$ )	交渉 $\succ$ 戦争 ( $1 - x \geq 1 - p - c_2$ )
$x > p + c_2$	交渉 $\succ$ 戦争 ( $x > p - c_1$ )	戦争 $\succ$ 交渉 ( $1 - p - c_2 > 1 - x$ )

# 戦争の交渉モデル

## 整理：交渉可能領域 (bargaining range)

- ▶ 戦争の不合理 ( $c_i > 0$ ) を仮定する限り，係争状況において，すべての主体が合意可能な (交渉  $\geq$  戦争と考える) 「交渉可能領域 (bargaining range)」が存在する
- ▶ コストを伴う「戦争による解決」よりも，コストのかからない (小さい) 「交渉による解決」が**双方にとって**好ましいから



# 交渉と戦争

## 交渉可能領域 (bargaining range) の存在 (Powell, 2006, 177)

Bargaining indivisibilities do not solve the inefficiency puzzle by rendering it moot. Even if the disputed issue is **indivisible**, there are still agreements both sides prefer to resolving the issue through costly fighting. The problem is, rather, that the states cannot commit to these agreements. More generally, **the fact that fighting is costly implies that a bargaining range always exists** even if the states are risk-acceptant, the issue is indivisible, or there are first-strike or offensive advantages

## 戦争の原因？

- ▶ なぜ交渉による解決が可能、かつ「得」にもかかわらず、交渉が失敗してしまうのか？
- ▶ 2つ  $+\alpha$  の戦争原因論：相手を信用できる？ 今日信用できても、明日も信用できる？ そもそも、パイは切ることができる？
- ▶ 簡略なモデルを用いて、順次考えていく